

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：13903

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04261

研究課題名(和文) 道徳的意思決定の進化心理学的基盤についての実証的研究

研究課題名(英文) Empirical research on the evolutionary psychological basis of moral decision making

研究代表者

小田 亮(Oda, Ryo)

名古屋工業大学・工学(系)研究科(研究院)・教授

研究者番号：50303920

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：進化心理学の観点から、道徳的判断に関わる意思決定の至近要因についてその構造を明らかにすることを目的とした。研究内容は以下の3つである：(1)血縁びいきの個人内変動に影響する諸要因についての実験研究、(2)嘘に影響する諸要因についての実験研究、(3)嘘に対する態度についての実験研究。(1)については規範倫理と血縁びいきが対立する問題について認知負荷の影響を調べた。(2)については電子サイコロを用い、「利他的な嘘」に影響する要因について調べた。(3)については嘘や窃盗などの道徳違反について、他者の非難の程度を予想した条件としなかった条件とのあいだで自身の非難の程度に差がみられるかどうか検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代ではグローバル化や少子高齢化による社会構造の変化に伴い、旧来の社会規範に見直しが迫られている。社会規範がヒトの進化において果たしてきた役割を解明することにより、これからの社会規範のあり方を考えることは、社会科学の課題のひとつであるといえるだろう。本研究により、道徳的意思決定のもつ社会的環境への適応としての側面を明らかにすることができた。これらの成果は社会心理学に留まらない、より幅広い社会規範研究につながる可能性を秘めている。また倫理的な行動を引き出す環境づくりや、初等教育において教科化が進められている道徳教育について、科学的な視点からの提言を可能にすることが期待される。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the project was to clarify the structure of proximate factors of decision-making related to moral judgment from the viewpoint of evolutionary psychology. There are three main research topics: (1) Experimental research on various factors affecting intra-individual variation of nepotism, (2) Experimental research on various factors affecting telling lies, and (3) Experimental research on attitude toward lies. Regarding (1), we investigated possible effects of cognitive load on tasks in which normative ethics and nepotism were incompatible. Regarding (2), we used electronic dice to investigate the factors that influence "altruistic lies." Regarding (3), I examined whether the degree of condemnation with respect to moral violations such as lies and theft was differed between the condition in which participants estimated others' degree of condemnation and that in which they did not.

研究分野：人間行動進化学

キーワード：利他行動 道徳 進化心理学 血縁淘汰

1. 研究開始当初の背景

道徳的判断の大きな問題は、それが一見生物学的観点から説明できないようにみえる場合があることである。個体があまり変化のない環境におかれるのであれば、遺伝子は個体の行動をある程度「造り込んで」おけばいい。しかし、もし環境の変化が激しく、予測できないことが多ければ、意思決定は個体の裁量に任せるべきだろう。自然淘汰が働くと、基本的に生物はより多くの遺伝子を次世代に残すような行動をとることになる。しかし、目的があまり一般的になると、遺伝子にとっての利益と個体にとっての利益が一致しないという事態が生じる。人間は、個体の裁量に任せる制御方式を発達させてきた種といえるだろう。一見適応的ではないようにみえる道徳的意思決定は、このような制御方式から生み出されたものではないかと考えられる。人間は社会性が高く、適応すべき社会的環境を自ら創り出す傾向がある。そのような環境では、遺伝子の利益よりも個体の利益を第一にするという行動が進化する可能性があるだろう。

進化の結果、生物は自分自身と、自分と遺伝子を共有している個体の利益を優先させるようになると考えられる。つまり、血縁をひいきし、自己と血縁個体の利益のために非血縁個体をだまし、搾取するようになるだろう。しかしながら、一方で人間には道徳的判断があり、血縁個体よりも他人を重視したり、嘘を抑制したりといったように、自らの利益を抑制して他人の利益のために行動することをよしとしている。こちらはおそらく個体の裁量に任せる制御方式として進化してきたと考えられる。それらは、人間が自ら創り出した社会的環境への適応として捉えることができるのではないだろうか。つまり、一見適応的ではない道徳的判断は、それをよしとする信念の「共有性」によって維持されていると考えられる。このような視点から血縁ひいきや嘘といった行動を研究することにより、道徳的判断に関わる意思決定の至近要因について、その構造を明らかにすることができるだろう。

2. 研究の目的

進化心理学の観点から、道徳的判断に関わる意思決定の至近要因について、その構造を明らかにする。具体的な研究対象となるのは、血縁ひいきと嘘に関わる道徳的意思決定である。

3. 研究の方法

上記目的に照らして、研究代表者(小田)と2名の研究分担者(平石、松本)が、それぞれ以下の実験室実験、調査とデータ分析を行った。

(1)研究A: 血縁ひいきの個人内変動に影響する諸要因についての実験研究

(2)研究B: 嘘に影響する諸要因についての実験研究

(3)研究C: 嘘に対する態度についての調査研究

4. 研究成果

上記の3研究から得られた主たる結果の概要をそれぞれ以下に記す。

(1)研究A

目的

モラルジレンマとは、ふたつの義務に関する選択肢があり、どちらかを選ぶことがもう一方の選択肢を不可能にする場合、いずれの選択も義務に反することになってしまうという状況である。倫理や道徳に関する意思決定を対象とする場合、現実の状況において調査することは困難なので、このようなモラルジレンマを想定場面として出題する課題を用いることが一般的である。本研究ではモラルジレンマ課題を用い、影響する要因を操作することにより、回答者の血縁への態度を測定する。具体的にはトロッコ問題を用い、同じ実験参加者に5人のきょうだいを救うために1人の赤の他人を橋から突き落とすかどうか(きょうだいバージョン)、5人の赤の他人を救うために1人の赤の他人を橋から突き落とすかどうか(他人バージョン)という両方の問題について回答してもらおう。先行研究では、他人バージョンにおいて回答の際に参加者に認知負荷をかけると、功利主義的判断の反応潜時は長くなるが、一方で非功利主義的判断の反応潜時は影響されないことが報告されている(Green et al., 2008)。本研究では、Green et al. (2008)と同様の実験方法を用い、きょうだいバージョンという、規範倫理と血縁ひいきが対立する問題について、認知負荷の影響を調べることが目的である。血縁淘汰に基づいた判断が無意識のものであるなら、「突き落とす」という判断をした場合の反応潜時が他人バージョンのそれよりも短くなることが予想される。

方法

実験室において、大学生164人(男性103人、女性61人)を対象に実験を実施した。実験参

加者にはトロッコ問題の他人バージョンときょうだいバージョンを4つのダミー問題と共に、無作為な順番で呈示した。参加者は認知負荷あり条件と認知負荷なし条件のどちらかに振り分けられた。参加者には問題を声に出して読んでもらうが、認知負荷条件では、画面上で無作為な順番で呈示される0から9までの数字のうち、5が出てきたらボタンを押す、という認知負荷課題を同時に行ってもらった。問題を読み終えたら「文章を読み終えた」というボタンを押してもらい、問題に対する回答(突き落とすことに賛成か反対か)をボタンを押すことで回答してもらう。「文章を読み終えた」というボタンを押してから、回答ボタンを押すまでの時間を反応潜時として記録、分析した。

結果

基準に従って反応潜時の外れ値を除外した結果、きょうだいバージョン・認知負荷あり条件では73人、きょうだいバージョン・認知負荷なし条件では69人、他人バージョン・認知負荷あり条件では73人、他人バージョン・認知負荷なし条件では72人を分析対象とした。他人バージョン・認知負荷あり条件での回答の割合は、賛成が19%で反対が81%であった。一方、他人バージョン・認知負荷なし条件での回答の割合は、賛成が15%で反対が85%であり、意思決定については認知負荷の有意な影響はなかった。他人バージョンにおいては反応潜時に対して認知負荷の有意な主効果がみられ、認知負荷と判断の交互作用は有意ではなかった。認知負荷をかけることによって、賛成(1人の赤の他人を突き落とす)と反対(1人の赤の他人を突き落とさない)ともに反応潜時が長くなった。この結果から、賛成(1人の赤の他人を突き落とす)つまり功利主義的判断についてはGreene et al. (2008)の結果が追認されたが、反対(1人の赤の他人を突き落とさない)つまり非功利主義的判断については異なっていた。

きょうだいバージョン・認知負荷あり条件での回答の割合は、賛成が77%で反対が23%であった。一方、きょうだいバージョン・認知負荷なし条件での回答の割合は、賛成が70%で反対が30%であり、他人バージョンと同様に、意思決定については認知負荷の影響はなかった。きょうだいバージョンでは、反応潜時に対して認知負荷と判断の有意な主効果と交互作用ともにみられなかった。つまり認知負荷と判断ともに反応潜時に影響していなかった。

考察

本研究の結果から、人はきょうだいバージョンのように血縁が関係する状況において、血縁淘汰に基づいて直観的に判断している可能性が示された。他人バージョンにおいては、反応潜時に対して認知負荷の影響があるのに対し、きょうだいバージョンにおいては、反応潜時に対して認知負荷の影響はなかった。つまり、認知資源を必要としていないことから直観的に判断しているといえるだろう。ただし検討すべき課題はある。本実験においては反応潜時に対する順序の主効果はみられなかった。参加者が、他人バージョンを先に回答し、その後きょうだいバージョンを回答した場合、後者の課題文を前者の課題文と同じだと思い込んでしまった可能性がある。2つの問題を同じ問題と思い込んでしまうと、後者の反応潜時は短くなる。本実験においては実験後のインタビューを行わなかったため、参加者がふたつのトロッコ問題を別々の問題として判断していたかどうかは不明である。

(2)研究B

目的

嘘をつくことは社会倫理に反する行為だが、人間は嘘の結果として他者に利益がもたらされるのであれば、あえて嘘をつくことがある。この「利他的な嘘」を対象として、人が嘘をつくときに影響する要因を調べる。Lewis et al. (2012)は、コップの中でサイコロを振ってもらい、底に開けた穴から覗いて出た目を申告してもらうという'die-under-the cup'法を用い、実験参加者に申告された目に応じた金額が寄付されると教示すると、本来は同じ確率になると期待される1から6の目の報告が大きな目に偏ることを明らかにした。この「利他的な嘘」には何が影響しているのだろうか。人はポジティブな自己概念を保つために、嘘を正当化しようとする傾向があるといわれている。これまでの研究で、事実とは異なるが、望ましい結果が観察された場合には、嘘の正当化が起りやすいことがいわれてきた。例えばDana et al. (2011)は、'die-under-the cup'法を用いて、参加者に最初に出た目を申告してもらい、その数に応じた報酬を払った。すると1回しかサイコロを振らなかった参加者よりも、複数回振った参加者の方が大きな目を申告する傾向があった。これは、1回目以降に出た目が「望ましい結果」として嘘を正当化したと考えられる。しかし、この方法では参加者が実際にどのような目を出したのかについては間接的にしか分からない。そこで、本研究では出た目が遠隔で表示される電子サイコロを用い、参加者が実際に出した目が実験者に分かる条件のもとで、「利他的な嘘」に望ましい結果が影響するかどうか検討した。

方法

Lewis et al. (2012)の方法に準じ、参加者以外には出た目が分からない状況でサイコロを振ってもらう。実験室において、大学生 226 人（男性 128 人、女性 98 人）を対象に実験を実施した。上部に覗き穴、下部に手を入れることのできるスペースを開けた段ボール製の四角い箱を机上に用意した。用いたサイコロは Game Technologies 社の Dice+ という製品である。1 辺が約 2cm の立方体で、BlueTooth を用いて Android 端末に出た目を表示させることができる。参加者には 3 回サイコロを振ってもらい、1 回目に出た目のみを記録用紙に記録してもらった。参加者にはサイコロを降る前に、出た目の数に 20 円を掛けた金額が実験者から NPO 法人難病のこども全国支援ネットワークへ寄付されることが説明された。その後、参加者には実験についてどう感じたかを訊ねる事後質問紙に回答してもらった。

結果

サイコロを 3 回以上振ったり、事後質問紙分析の結果サイコロの挙動に疑いを抱いていたりした参加者は分析から除外した。結果として、134 人（男性 75 人、女性 59 人）を分析対象とした。ほとんどの参加者（126 人）は正直に 1 回目の目を申告していた。7 人が実際に 1 回目に出た目よりも大きな目を申告した。1 回目に出た目よりも小さな目を申告した参加者が 1 人いた。「利他的な嘘」をついた 7 人のうち 6 人は女性であったが、統計的に有意な偏りではなかった。1 回目に 1 から 3 までのより小さい目を出した 79 人のうち 7 人が「利他的な嘘」をつき、1 回目に 4 から 6 までのより大きな目を出した 54 人は誰も「利他的な嘘」をつかなかった。これは統計的に有意な偏りであり、2 回目以降の、より大きな数が出たという「望ましい結果」が嘘に影響したと考えられる。

考察

今回の実験では、「利他的な嘘」をついた参加者は全体の 5% しかいなかった。同様の実験を普通のサイコロを用いて行った先行研究では、「利他的な嘘」の割合は約 11% と推測される (Oda et al., 2015)。少ない理由としては、今回用いた電子サイコロが見慣れないものであり、分析から除外しなかった参加者も無意識のうちに疑いを抱いて、嘘が抑制された可能性がある。また、先行研究では寄付先が震災の被害者だったのに対して、今回は難病の子どもということで、嘘をつく動機に差があった可能性もある。今回の実験は、出た目が実験者にも分かるサイコロという画期的な方法を用いたものであり、今後の発展が期待できるだろう。

(3) 研究 C

目的

人間は嘘のような倫理に反する行為に対して非難をする。このような道徳的非難は他の動物種にはみられないものであり、また非難の対象が人物ではなく行為に向いているところが特徴的である。道徳の進化を考えるうえで、この道徳的非難のメカニズムと機能を考えることは重要である。DeScioli と Kurzban (2013) は Dynamic Coordination Theory を提唱し、道徳的非難にはコーディネーション問題を解決し、集団成員の一致をもたらす機能があると主張した。コーディネーション問題とは、集団の全成員が同一の態度や行動を持つことの利益が大きいときに、どのようにして一致させるかという問題である。例えば道路の左右どちらを通行するかはコーディネーション問題である。ここで重要なのは成員の行動の一致であり、右か左か自体は重要でない。もし道徳的非難にこのような機能があるのであれば、他者の存在が非難の程度に影響を及ぼすことが予想される。そこで本研究では、回答者に嘘や窃盗などの道徳違反についての場面を想定してもらい、他者の非難の程度を予想した条件としなかった条件とのあいだで自身の非難の程度に差がみられるかどうか検証した。

方法

インターネット調査会社マクロミルの会員を対象に、ウェブ上での質問紙調査を実施した。マクロミルの会員のなかから、20 代、30 代、40 代、50 代それぞれ男女 206 人ずつになるように割付をし、合計 1,648 人が回答した。回答者はウェブ画面上で、ふたつの道徳違反に関する想定場面を読んだ。ひとつは拾った財布から現金を盗んだ人の話（窃盗場面）であり、もうひとつは履歴書に嘘の経歴を書いて就職した人の話（履歴書場面）である。これらについて、倫理的にどれくらい許せないかを 9 段階で判断し、回答してもらった。実験条件（男女 412 人ずつ）では、自分の判断を答える前に、他の回答者がどれくらい許せないと答えるかを 9 段階で予測してもらい、次に自分の非難度を答えてもらった。一方、対照条件（男女 412 人ずつ）では自分の非難度のみを答えてもらった。

非難度は分布が偏っており正規分布とはいえないことから、順序変数とみなして、性別、年齢、条件、それらの交互作用を要因とした順序ロジスティック分析を行った。

結果

窃盗場面と履歴書場面とのあいだで結果に違いがみられた。窃盗場面については、性別、年齢の主効果と、年齢と条件との交互作用が有意であった。非難度は男性よりも女性の方が、また年齢が高くなるほど高くなっていた。一方で、若年層では実験条件の方が弱く、逆に年配層では実験条件の方が強くなっていた。履歴書場面についても同様に性別と年齢の主効果が有意であったが、交互作用は有意ではなかった。

考察

男性よりも女性の方が、また高年齢の方が道徳的非難度が高くなるという結果は、身体的に弱い立場ほど道徳的非難を強くするという先行研究の結果と一致していた (Sparks & Barclay, 2015; Northover et al., 2017)。他者の非難度を予想することは自身の非難度に影響しなかったものの、年齢との交互作用が有意であり、他者の非難度の予測は、非難度が低い傾向がある若年層では自身の非難度をより低くする方向に、逆に非難度が高くなる年配層ではより高くする方向に効果があることが示唆された。これは、道徳的非難は成員の一致こそが重要であり、コーディネーション問題を解決するために進化したという Dynamic Coordination Theory を支持する結果であるといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Ryo Oda, Motoki Kato, Kai Hiraishi	4. 巻 9
2. 論文標題 Effects of Observed Counterfactual on Prosocial Lying: A Preliminary Report	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Letters on Evolutionary Behavioral Science	6. 最初と最後の頁 5-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5178/lebs.2018.66	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Arnaud Tognetti, Noriko Yamagata-Nakashima, Charlotte Faurie, Ryo Oda	4. 巻 127
2. 論文標題 Are non-verbal facial cues of altruism cross-culturally readable?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Personality and Individual Differences	6. 最初と最後の頁 139-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi.org/10.1016/j.paid.2018.02.007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Oda, Ryo	4. 巻 8
2. 論文標題 Does perceived vulnerability to disease predict life-history strategy in Japanese adults?	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Letters on Evolutionary Behavioral Science	6. 最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5178/lebs.2017.62	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Oda, Ryo	4. 巻 8
2. 論文標題 Effect of being conscious of others on moral condemnation	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Letters on Evolutionary Behavioral Science	6. 最初と最後の頁 20-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5178/lebs.2017.58	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Shikishima, Chizuru; Hiraishi, Kai; Takahashi, Yusuke; Yamagata, Shinji; Yamaguchi, Susumu; Ando, Juko	4. 巻 121
2. 論文標題 Genetic and environmental etiology of stability and changes in self-esteem linked to personality: A Japanese twin study.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Personality and Individual Differences	6. 最初と最後の頁 140-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.paid.2017.09.013	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平石界	4. 巻 36
2. 論文標題 堪え性のない研究者からみた研究者のアイデンティティ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 基礎心理学研究	6. 最初と最後の頁 113-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平石界	4. 巻 60
2. 論文標題 性差研究とジェンダー差研究に共通する視点	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 111-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下地芳郎、内山愉太、藤平祥孝、香坂玲、松本晶子、平野典男	4. 巻 8
2. 論文標題 沖縄における環境協力税の導入に関する考察：観光の基礎となる地域の社会経済状況に着目して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 観光科学	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本晶子	4. 巻 8
2. 論文標題 観光による自然資源への正負の影響.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 観光科学	6. 最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ryo Oda	4. 巻 40
2. 論文標題 Just My Imagination: beauty premium and the evolved mental model	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Behavioral and Brain Sciences	6. 最初と最後の頁 e37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1017/S0140525X16000583	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Fiddick, L., Brase, G. L., Ho, A. T., Hiraishi, K., Honma, A., Smith, A.	4. 巻 62
2. 論文標題 Major personality traits and regulations of social behavior: Cheaters are not the same as the reckless, and you need to know who you 're dealing with	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Journal of Research in Personality	6. 最初と最後の頁 6-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jrp.2016.02.007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計22件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 林佳奈子, 小田亮
2. 発表標題 理想の異性の道徳性とは? - 同類婚の可能性と性差の検討
3. 学会等名 日本人間行動進化学会第11回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 和田脩平, 平石界, 小田亮
2. 発表標題 「道徳的な」主張の強さは他者の存在に影響されるのか?
3. 学会等名 日本人間行動進化学会第11回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 兼松伸帆, 平石界, 小田亮
2. 発表標題 利他主義者の見極めは、顔のどこを手がかりとしているのか?
3. 学会等名 日本人間行動進化学会第11回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小田亮, 平石界
2. 発表標題 コストのかかる信号としての主張の強さを測定する
3. 学会等名 日本人間行動進化学会第11回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小田亮
2. 発表標題 コストのかかった主張への他者の影響
3. 学会等名 日本動物行動学会第37回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ryo Oda, Tomomi Tainaka, Noriko Yamagata-Nakashima, Kai Hiraishi
2. 発表標題 Do manipulated mood affect altruist detection?
3. 学会等名 Human Behavior and Evolution Society 30th Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小田亮、本城貴基、武田美亜
2. 発表標題 ヒトにおけるPatternicityの個人差
3. 学会等名 KOUDOU2017
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小田亮
2. 発表標題 感染脆弱性の自覚は生活史戦略の個人差に影響するか？
3. 学会等名 第71回日本人類学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森島航介、花島夏紀、平石界、小田亮
2. 発表標題 利他主義者の見極めは分析的か？
3. 学会等名 日本人間行動進化学会第10回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 欄宜田一雅、花島夏紀、平石界、小田亮
2. 発表標題 「道徳的」主張の強さは他者の存在によって変わるのか？
3. 学会等名 日本人間行動進化学会第10回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大西健斗、小田亮
2. 発表標題 主観的な差の判断にみられる個人差と影響する要因
3. 学会等名 日本人間行動進化学会第10回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 平石界、横田晋大、池田功毅、中西大輔、小田亮
2. 発表標題 コストのかかる旗としての道徳(2)
3. 学会等名 日本人間行動進化学会第10回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 池田功毅、中西大輔、横田晋大、平石界
2. 発表標題 放射能関連リスクに対する認知：縦断データの階層的因子分析
3. 学会等名 日本人間行動進化学会第10回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 時田真美乃、平石界
2. 発表標題 心の状態及び数学的課題における再帰的推論の処理時間の関連性：再帰的事象の認識における、心の状態と論理-数学的知能の関連について
3. 学会等名 日本人間行動進化学会第10回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 平石界、野口貴滉、高橋沙英、豊生紗也、曾根のぞみ、田村幸大、宮川彩花、鈴木絵美、布川結望、渡辺春菜
2. 発表標題 家族と男女の進化心理学を追試する
3. 学会等名 日本社会心理学会第58回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 平石界
2. 発表標題 「公平」へのダーウィンのまなざし
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ando, Juro, Hiraishi, Kai
2. 発表標題 Teaching motivation and altruism: A Japanese twin study
3. 学会等名 47th Behavior Genetics Annual Meeting
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 和田幹彦, 小田亮
2. 発表標題 法的「トロツコ問題」の初調査実験：倫理問題との回答データの異同分析
3. 学会等名 日本人間行動進化学会第10回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 平石界, 横田晋大, 池田功毅, 中西大輔, 小田亮
2. 発表標題 コストのかかる旗としての道徳:進化シミュレーションによる予備的検討
3. 学会等名 日本人間行動進化学会第10回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 田井中智美, 平石界, 小田亮
2. 発表標題 利他主義者の見極めは気分に影響されるのか？
3. 学会等名 日本人間行動進化学会第10回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 本城貴城, 武田美亜, 小田亮
2. 発表標題 パレイドリアにみられる個人差と適応的意義
3. 学会等名 日本人間行動進化学会第10回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 北條逸群, 平石界, 小田亮
2. 発表標題 5人のきょうだいを犠牲にすることは功利的か? : 認知負荷を用いた検討
3. 学会等名 日本人間行動進化学会第10回大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 太田紘史, 小田亮, 田中泉史, 飯島和樹, 永守伸年, 信原幸弘, 片岡雅知, 立花幸司, 吉田敬	4. 発行年 2016年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 456
3. 書名 モラル・サイコロジー: 心と行動から探る倫理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	平石 界 (Hiraishi Kai) (50343108)	慶應義塾大学・文学部(三田)・教授 (32612)	
研究分担者	松本 晶子 (Matsumoto Akiko) (80369206)	琉球大学・国際地域創造学部・教授 (18001)	